

4.6 個別の教育支援計画，個別の指導計画のシステム作りと授業改善への ICF の活用

静岡県立御殿場特別支援学校 教諭 山元 薫

1. ICF を活用するに至った背景

静岡県立御殿場特別支援学校（以下、本校）は2市2町を学区とする知肢併設の学校です。2000年4月に県立移管されて以降、児童生徒数は増加を続け、2006年には当時の2倍の人数に増え、現在全校児童生徒数188名、教員数101名の規模の学校となりました。

特殊教育から特別支援教育への転換が図られる中、教師が急激に増加・多様化する児童生徒のニーズを的確にとらえ、教育実践する力が必要と考えました。そのためには、児童生徒一人一人の今を生きる姿を多面的にとらえ、将来の生きたい姿に向けて必要な教育を実践し、学校完結型の授業から生活でできる力を育む授業実践ができるよう新しい個別の教育支援計画，個別の指導計画のシステムを作り、授業改善していくことが急務となりました。そのための有効な手段として、児童生徒の障害の状態を多面的・総合的にとらえることができる ICF の考え方を取り入れ、児童生徒の生活機能の向上、「参加」の拡大をめざした教育実践を行うことを本校の学校経営の中に盛り込みました。

2. ICF 活用の実際

本校では、子どもの実態把握から個別の教育支援計画の作成，個別の指導計画作成，授業づくり，評価に至るまで、ICF を活用しています。

(1) 個別の教育支援計画及び個別の指導計画作成への活用

実際の活用手順は以下の通りです。

①家庭訪問（個別面談）にて生活地図（図1①）の作成

「生活地図」を用いて、保護者と本人、担任で、現在の生活環境全般、将来像について共通理解します。その中から、中心課題（人が生きることの全体を示す『生活機能』を高めるために、今改善・克服したい学習上、生活上の課題）を導き出します。

②生活地図を基に個別の教育支援計画（図1②）の作成

生活地図で導き出された3年後の願う姿を支援目標として、中心課題については今年度の重点目標としてそれぞれ個別の教育支援計画1に記載します。他機関との関係や取り巻く環境については個別の教育支援計画2に記載します。

③「支援シート（図1③）」（ICF構成要素間の相互作用図を図式化したもの）を用いたケース会議における、中心課題の妥当性と指導方法について検討及び共通理解

中心課題について「支援シート」を用いて、本人の気持ち、中心課題にかかわる病気や変調、障害の程度、「できる」こと、「している」こと、有効な手立て、適した環境設定の方法等を検討します。その検討の結果、中心課題に関する指導場面、指導目標、手立てについて導き出します。

④個別の指導計画（図1④）の作成

支援シートから導き出された指導場面や指導方法，支援方法，手立て等を個別の指導計画1に明記します。

既存の情報：引き継ぎ資料、諸検査の結果、日ごろの観察から得られた結果等

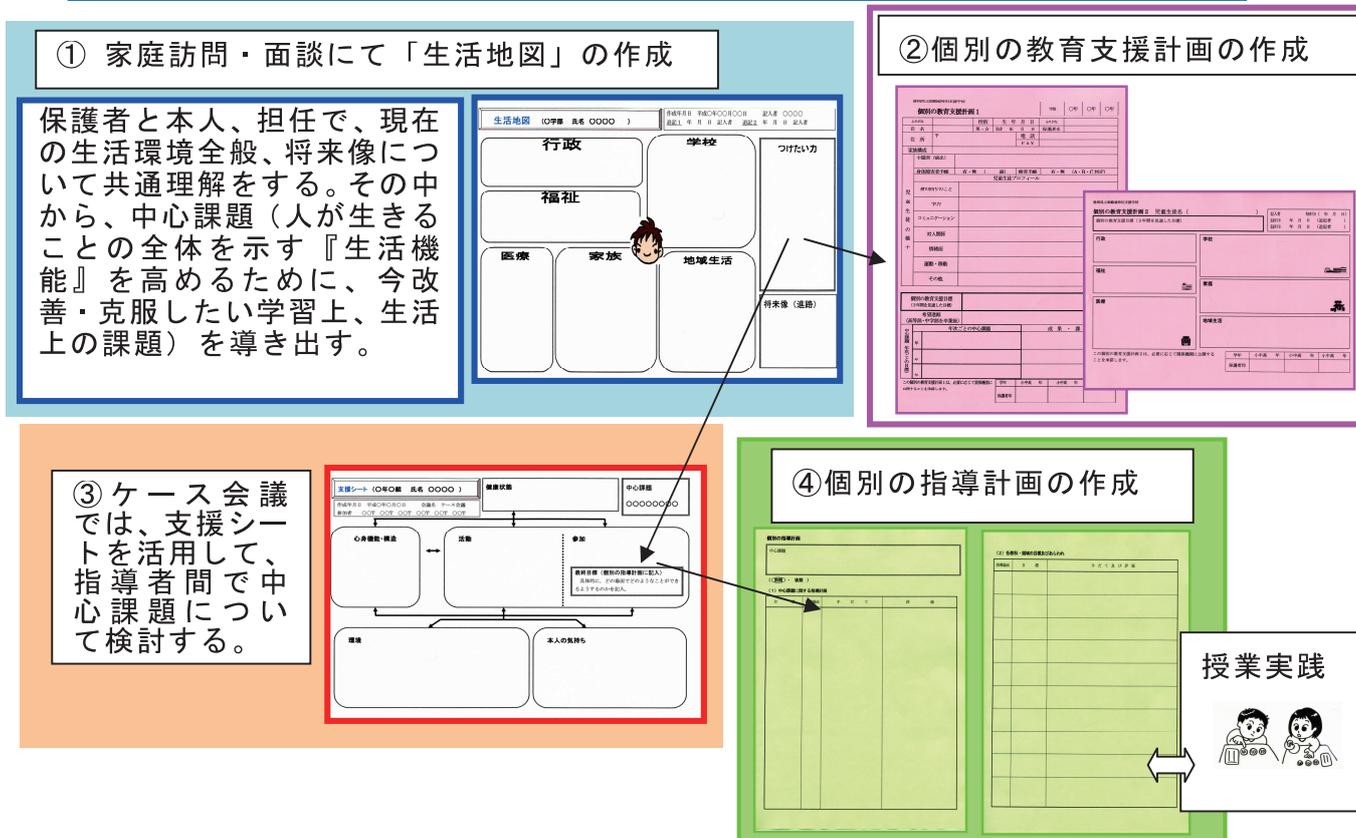


図1 御殿場特別支援学校における個別の教育支援計画及び4個別の指導計画作成のプロセス（図中の番号は、前頁2（1）活用の手順の番号と同じ）

(2) 授業づくりへの活用

支援シートを活用して授業づくりに関する検討を行い、単元(題材)目標，単元構想，授業構想，支援方法，他教科領域との関連，家庭との連携方法等を導き出します。実際の活用手順は，以下の通りです。

- ①個々の実態と学習集団の実態を把握します。個々の実態は，個別に作成した中心課題に関する支援シートやこれまでの学習の様子（成果，課題，意欲，適した環境設定等）を授業にかかわる教員が持ち寄り情報を共有します。
- ②個々の中心課題や教科及び教科領域のねらいをおさえつつ，本単元（題材）で達成したい目標に向けて単元（題材）構想，指導計画，指導する際の手立てや留意点等について，授業づくり用支援シート（図2）を活用して，検討します。
- ③授業づくり用支援シートの情報を整理して，学習指導案（もしくは，単元カード及び授業カード等）を作成し，個々の目標や手立て，学習環境の在り方，生活場面への広げ方，TTの役割分担等の授業づくりのポイント（図3）を明確にし，提示します。
- ④支援シートから導き出された支援シートを用いての授業評価・分析を行います。

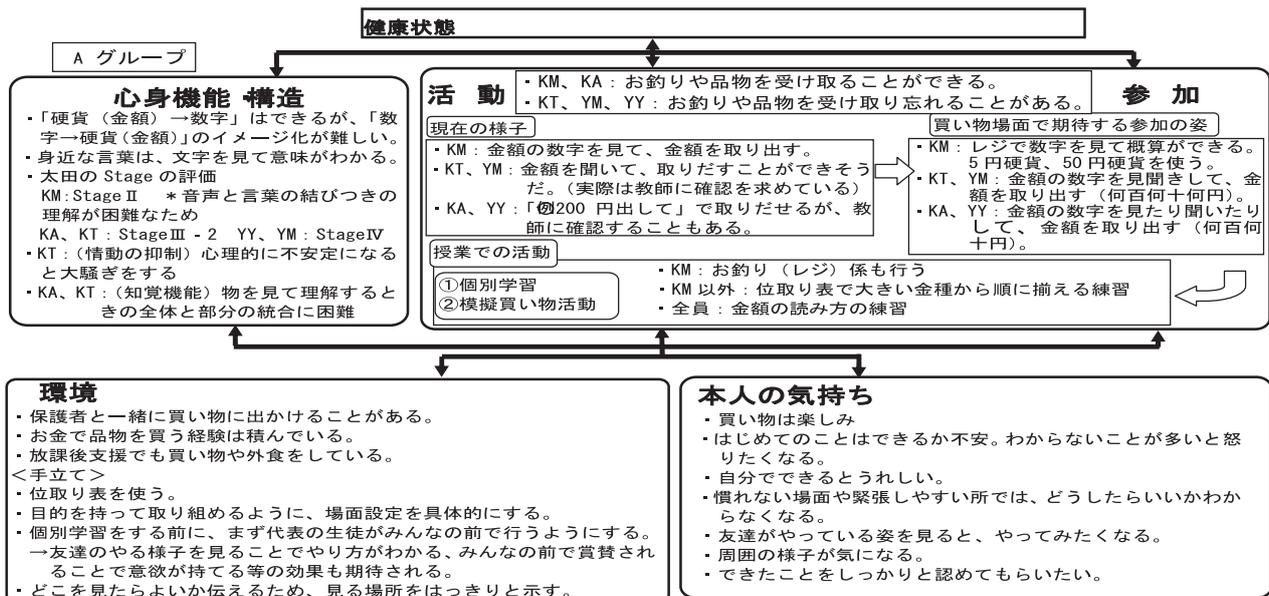


図2 授業づくり用支援シート活用例（中学部1年 数学科「買い物学習」）

<授業づくりのポイント>

- ①個別学習と模擬買い物活動を組み合わせた授業展開**
個別学習では、金銭に関する知識技能を個々の実態に応じて効果的に高める。さらに実際の場面に生かすために、模擬買い物活動を組み合わせて行う。
- ②個の活動と協働で行う活動の設定**
個々の金銭的な知識技能の獲得場面と友達の買い物実践している場面を見たり、やりとりをしたりする場面を設定する。そのためにTTの機能を生かし、役割分担を明確にして指導にあたる。
- ③生活単元学習と関連付ける**
生活単元学習の地域の商店への買い物学習と関連させて学習を計画し、生徒に目的意識を持たせ意欲を喚起する。また、学習の応用の場としても位置付ける。
- ④地域参加に向けた取り組み**
「買い物学習カード」を使い、学校でできるようになったことやできるために有効な支援方法を家庭と共有する。それにより家庭でも地域で買い物をする機会が増えることを期待している。

<授業展開例>

活動内容	→手立て ※留意点
1 個別学習 (1) プリント問題 ①問題を解く（硬貨を数え金額を答える） ②TTに持っていき採点してもらう ③ファイルに綴じる (2) お金を揃えよう ①友達の手本を見よう 代表生徒が黒板でお金の見本を操作し「いいですか」と聞く。他生徒は「いいです」と言う。 ②小グループの学習 <KM, KT, YMグループ: T1> ①提示された金額を揃える。 (何百何十何円) KM, YM: 位取り表を使う <KA, YY: T2> ①位取り表を使い、提示された金額を揃える。 (何百何十何円) ②金額を読み上げる ③個々の課題が終了後、ポシェット、財布をとりに行き、各自で決められた金額を財布に入れる。	→T1: 教室前で待機し採点を行う。読み方の確認及び間違い箇所の指摘や直し方の確認をする。 →T2: 個別指導のために机間指導をする。 *T1の前で「できました」と報告する決まりを作る。 →T1: 代表生徒の補助(数え方、友達への聞き方)。 →T2: 見ている生徒に注意を促す。 →KM: 素早く正確にやるために一度に8問渡す。5円硬貨、50円硬貨を使う問題の出し方をする。 →KT, YM: 一度に4問渡す。手元の硬貨は金種ごとにわけて渡す。 →KA, YY: 一度に1問ずつ教師が問題を出す。手元の硬貨は金種を混ぜて渡す。 →YY: 硬貨への注目を促すために金種の名称を聞く。 →KM: 5円硬貨、50円硬貨を含む →YM, KT: 1円硬貨、10円硬貨、100円硬貨を使う。 →KA, YY: 10円硬貨、100円硬貨を使う。
2 模擬買い物活動「スーパーで買おう」 ①「買い物カード」を見て、決められた品物を選ぶ。 ②レジに行き、代金を支払う。 ③品物を受け取り自分の席に戻る。 *一度に3人ずつ行い、一人2回以上できるようにする。	→T1: 買い物援助及びレジ係 T2: レジ係り *本物の品物及び、本物の硬貨を使用する。 *レジは2箇所設け、1台は本物、もう1台は大きめの計算機を使用する。 →KM: 5円硬貨、50円硬貨を必ず使うように財布の中の金種の数を調整しておき、「185円」等の金額を提示する。 →レジでの支援の仕方: ①金額を読み上げる。②レジの金額の数字をよく見るよう指さしをする。③「100円は何個?10円は何個?1円は何個?」と言葉掛けする。 *様子により①②③の順に手だてを加える。

図3 支援シートから導き出された授業づくりのポイントと授業展開

3. 活用後の成果と今後の展望

これらの取組を通じた得られた成果と課題、今後の展望は以下の通りです。

(1) 成果

①教師の意識の変化

児童生徒の「できない」行動だけに注目するのではなく、児童生徒の全体像を捉えかつ多面的に分析し、より良い支援方法を導き出し指導すべきであるといった意識改革を図ることができました。また、支援シートを活用した中心課題に関するケース会議を行うことで、教師間で情報を共有し中心課題を意識して指導全般にあたるようになりました。

②個別の教育支援計画策定及び個別の指導計画作成のプロセスの完成

このプロセスは、教師が児童生徒たちを現在を生きる生活者として見るために有効なツールでした。学校生活や授業等での断片的な児童生徒の理解ではなく、児童生徒の生きる像をICF関連図より相関的に理解し、現在及び将来の参加に向けて、個々の中心課題を踏まえつつ、個別の指導計画の作成と授業実践、評価が可能になりました。

③ICFの考え方を活かした授業づくり

ICFの考え方を活かした授業づくりを行うことで、以下のような授業改善の成果が見られるようになりました。

1) 授業のつくり方の変化

個々の中心課題をふまえつつ、各教科、教科領域を合わせた指導のねらいを達成するためには、授業はどうあるべきか、児童生徒の実態、環境、気持ち等を相関的にとらえ、授業が構築されるようになりました。この取組により、教師、児童生徒、教材の授業を構成する3つの要素について十分な吟味がされるようになりました。

2) 授業の変化

<活動を充実させた授業への転換>

主体的な活動を多く盛り込んだ授業展開がされるようになり、児童生徒の体験を通じた指導を積み上げることで、「できる」力の発揮できる場面を増やすことができました。

<つなぐ・かかわる授業構想>

まずは、一人一人が「できる」状況を発展させ、次に仲間とのかかわりの中で発揮できる力に、そして、他の場面や集団でも発揮できる力に育て、主体的に「参加」できるようにつなぎ、さらに生活につなげる指導構想が練られるようになりました。

<手立てが多面的に考えられた授業>

日常生活の様子や障害の状態等から、環境を含めて目標を達成するために有効な支援方法を導き出した授業を行うことができるようになりました。

<TTが有機的に機能する授業>

検討作業を行うことで、授業に関する情報が共有され、児童生徒の授業のねらいを共通理解できるようになりました。また、環境因子の一つとして指導者はどうあるべきか、意識して授業に参加することができるようになりました。

(2) 課題と今後の展望

- ①児童生徒の実態把握に関する精度をあげるため、ICF-CY チェックリストの項目を導入したり、他のアセスメントを併用したりすることで、より児童生徒の実態に即した授業をつくることができるようにしたい。
 - ②生活年齢に応じた「参加」に向けての課題とキャリア教育の視点とを照らし合わせ、児童生徒の現在及び将来の「参加」を促進する題材や単元を選定し、年間指導計画を作成させていきたい。
- 発達の変化の著しい小学部低学年では、現在本校の支援シートの書式では、書きづらさが指摘されています。児童生徒の発達の変化のスピードに適応した評価の時期、書式を検討し、より使いやすい書式に改良したい。

引用文献

- 1) 伊藤尚志 (2007). ICF を保護者と共有するためにー ICF 関連図を活用した支援シートについての保護者の説明事例から、ICF 及び ICF-CY の活用 試みから実践へー特別支援教育を中心にー, 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所, 158-163, ジアース教育新社.
- 2) 伊藤尚志 (2007). ICF を活用した学校生活づくりと社会生活への移行の取り組み, ICF 及び ICF-CY の活用 試みから実践へー特別支援教育を中心にー, 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所, 80-87, ジアース教育新社.
- 3) 文部科学省 (2009). 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編 (幼稚部・小学部・中学部・高等部).
- 4) 世界保健機関 (WHO)(2002). ICF 国際生活機能分類ー国際障害分類改定版ー, 中央法規.